

朝光寺村だより 1

1968.8.10

朝光寺原遺跡調査本部

朝光寺原遺跡 2 回目の発掘

中村嘉男

朝光寺原遺跡はこの周辺でも最大規模の遺跡でした。最近の都市開発によりこののどかであった田園地帯は住宅建設地帯に入り、この遺跡も東急の建設工区に入りました。その為、この地帯分布調査を行っていたメンバーで朝光寺原発掘調査団(団長岡本勇氏)が組織され、1967年8月1日から12月10日まできびしい状況のもとで発掘が行われました。

この遺跡は最大規模にふさわしい様に多数の竪穴・高床式建築址、方形周溝墓、古墳、台地の端に環状に作られたV字溝などが発見されました。

時期としては勝坂から加曽利 E 式期の集落址、V字溝にかこまれた宮ノ台式期の集落址 大住居址(共同体の家)を含む弥生町式期の集落址、方形周溝墓、多数の高床式建築址群、大形円墳、国分式期の分散状の集落址など、ここは集落址群の中での中心集落址としてまた墓地の聖地として交互に使われたことが明らかになり、縄文、弥生、古墳、奈良の集落址、住居址、墓地の構造的変化を追跡することが出来る貴重な成果を多数得ることが出来ました。

しかし、発掘調査団のささやかな体制では、2～3年は完全にかかるこの大遺跡を僅か5ヶ月余という短期間で多数の竪穴、墓地(上の段180の竪穴方形周溝墓20、大型円分1基、下の段30の竪穴、方形周溝墓5、円墳2基)を集中的に発掘したため細部にわたる点で多くのみおとしがあったと思います。例えば、V字溝内の細かな土壌の堆積状況、土塁を持っていた痕跡が埋土中より明らかなることが出来るかどうか、竪穴内の細かな埋積状況や小土器片の伴出状況など多くの点があると思います。今度の発掘で前回不明であった空白点を埋め、この朝光寺原遺跡をこころのこりなく完了させたいと思います。

各係と氏名	日課表
機材 宍倉・三田	7:00 起床
遺物 近井・渡辺	8:00 出発
測量 柳井・山本	8:30 作業開始
生活 柵橋・菊田	12:00
広報 坂上・栗田	昼食
写真 佐藤(史)	1:00
日誌 園山	5:00 作業終了
会誌 小島	6:00 夕食
	8:00 Meeting
	11:00 消燈
	守らない人は罰当番を くわせます—生活係談—

朝光寺村だより 2

1968.8.11

朝光寺原遺跡調査本部

発掘参加者

中村嘉男 沢田大多郎 柳川宏 宍倉義久 棚橋浩 近井洋一 渡辺重樹 山本えつ子
小泉明美 坂上克弘 佐藤史郎 園山祥治 三田博 菊田和子 栗田和子

宿泊住所

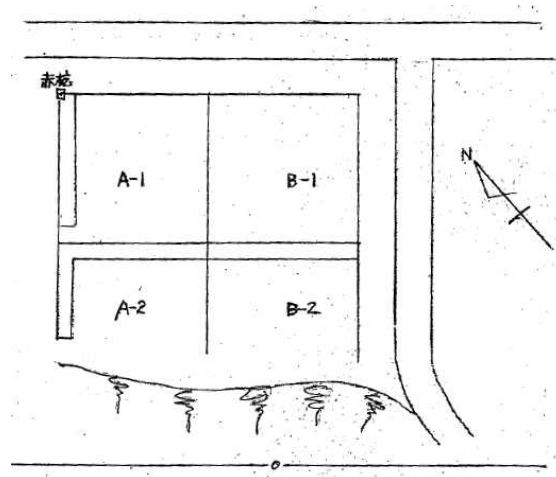
神奈川県横浜市下谷本1674 谷本小学校 TEL(891)7109

班編制

- 1班 棚橋・渡辺・三田・菊田
- 2班 山本・近井・坂上・佐藤
- 3班 宍倉・小泉・園山・栗田・柳川

本日より作業が開始されました。台風7号による雨の為、10時より始めて2時で作業中止となりました。

A-I区の除草・整掃を行った後、道のり上の赤杭を基点として1辺10mのグリットを設定しました。B-1からB-2区にかけて住居址らしいプランと、A-1からA-2区にかけて溝状プラン数本がみられたので、確認のためグリット内にトレンチを設定しました。



雑感

・昨日も雨、今日も雨で、意気込んできた皆はガッカリした様子。せめて発掘の気分を出そうと朝御飯をイショクゴテでよそりました。(本当は弁当屋さんがシャモジを忘れたのです)

・プロパンガスを今日ももって来てくれませんでした。

そこで、生活係曰く

「汗はプールで流して来てください。なお、石ケンを持っていかないで下さい。」今日のプールはよごれたでしょうねえ。

本日までの調査結果801 住居址

推定プランを2分する小トレンチを作り、形状を見る。その理由は、西側が自然傾斜地であり、又、ブルのために大きく破壊されているためである。その結果、総体的に西に低く傾斜するデコボコの床面が現れたが、これもブルの所業と見る。東壁の立上りは5 cm。焼土、埋蔵土器があり。遺物は覆土より縄文中期(勝坂式)土器多数、黒曜石剥片が出土した。

V字溝

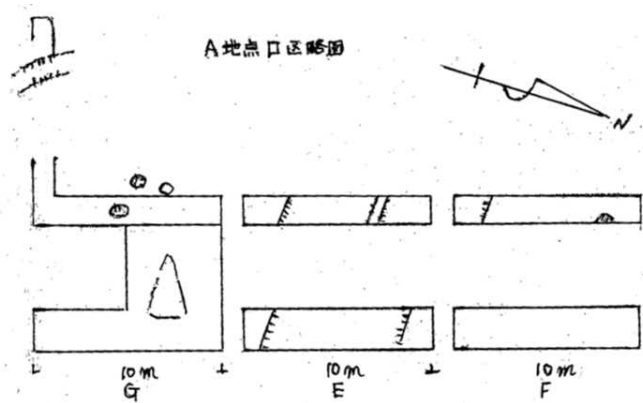
グリッドラインを基準に5 m 毎(南北方向)にセクション用土手を残して順次追求。北側延長部にU字溝との交差が見られるが、新旧関係は、プランからは判別し難く、50 cmの未発掘部を残したまま排土(セクションで新旧関係を調査の予定)。

A-2区西半分は完掘。A-2区においてV字溝南立上りは大きく開口しながら傾斜地に逃げている。遺物は覆土上層より縄文中期(勝坂式)、弥生(宮ノ台式)若干数が出土した。

確認され、E,F においては黒褐色の粘着性の強い土層と火山灰土の混入したサラサラした褐色土層との相違により落ち込みが明らかにされた。明日その遺稿を明確にしたい。

G においてはほとんどローム層が露出しており、清掃したところローム層を切り込んだ径40 cmのピットであろうとの想定で拡張したところ、他に3個のピットが確認された。その他は不明である。もし住居址のピットとしてもブルドーザーによる破壊で床面・壁を確認することは不可能である。

第2トレンチの南側から直角に長さ10 m 巾1 m の第3トレンチを西側に設定し、V字溝の探索をおこなったところ、このトレンチの西側で、巾2 m 深さ1 m のV字溝が確認された。一応このV字溝がどのようにこの台地を巡るのかを明日から追求すると同時に、第1、第2トレンチ内において確認されている遺溝について、拡張してその性格を明らかにしたい。



901号居住址

立正大学1年 横溝孝雄

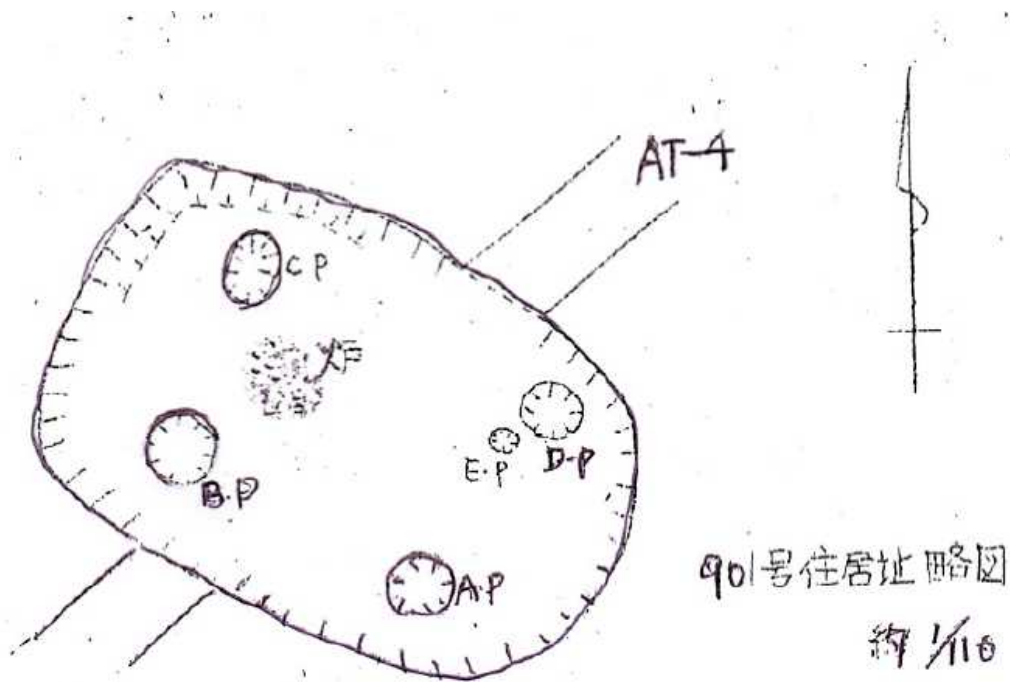
AT-4を掘ったさいに確認された901号住所址は、複雑なプランを呈したもので、苦心の未完掘したものである。すなわち、北側において壁は明確なものであったが、南側の壁は非常につかみにくくさらに東側においても同様なプランを呈しているためであった。住居址の平面プランは不整楕円形を呈するものである。

周溝は北側に部分的にみられる。

床面は非常に良好で、中央やや北西よりに蘆が確認された。

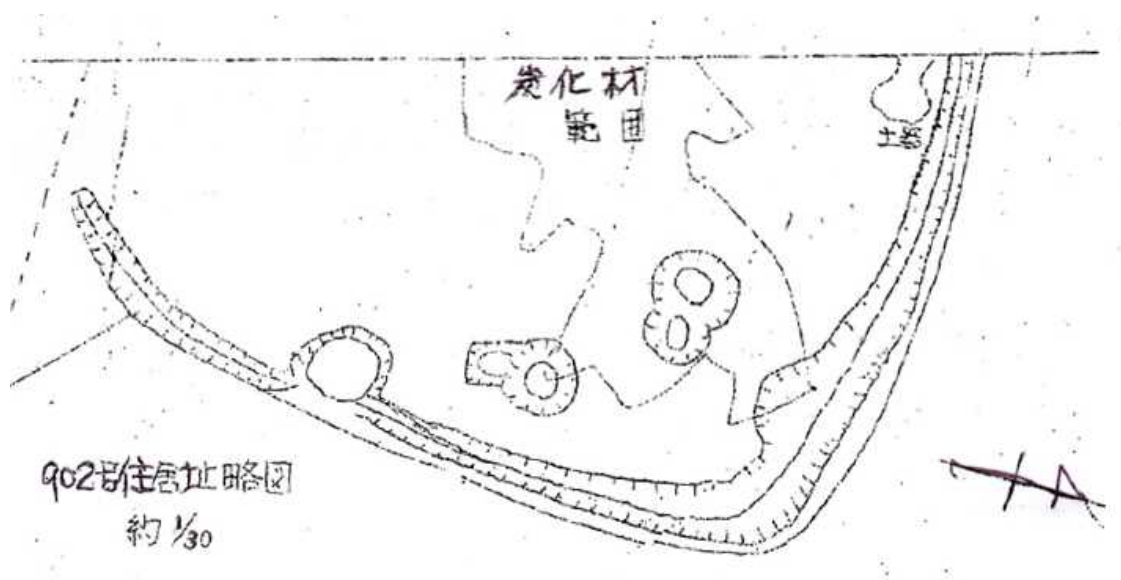
ピットは現在までに支柱穴と思われるAピット(床面より-75cm)、Bピット(-90cm)、C(-62cm)、D(-90cm)、支柱穴E(床面より-25cm)が確認できた。

この住居址の床面上の出土遺物や住居址のプランなどからみると宮ノ台期に相当するものと推定することができるものである。



Aトレンチによって住居の落ち込み発見され、北側に3 m、東側に1 m 拡張する事によって住居のプランを出して行き、作業を進めて行きました。

現地表面より130 cm下に確認された床面上には、当時火災にあったためであろう炭化された多量の柱が住居跡のほぼ中央に向かって倒れたままの形で発見され、床面は非常によく踏み固められている状態で確認された。尚、住居址西側の床面直上からは、朝光寺原式と呼ばれている土器が出土しているため、時期は弥生式後期に当たるのではないと思われる。住居址プランは隅丸方形のやや胴張りで、幅約15 cm、深さ10 cmの周溝が壁面に沿って回っている。又、炭化材を取り去った所にピットが二穴発見されたが、そのうち一穴は支柱穴かと思われる幅30 cmのピットが確認された。尚、この住居址は東急区画整理規定のため、北東の部分である全体の1/3しか掘ることが出来なかった。



801号住居址

日本大学3年 山本えつ子

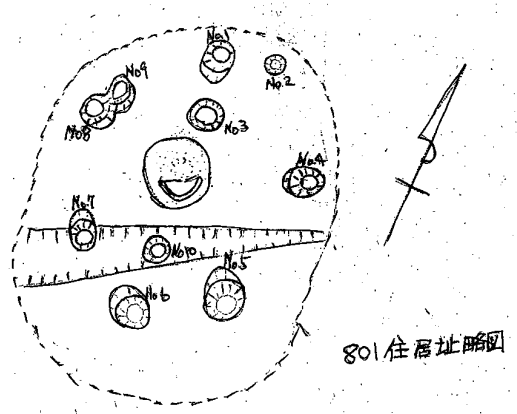
801号住居址はA-I区南端に位置し、B-1、B-2グリットにまたがる住居址である。本住居址は台地西側の自然傾斜とブルドーザーによる攪乱のため、プランを確認することは困難をきわめた。特に、住居址西側は完全に破壊されどのような状態であったのかは全く不明である。しかし、柱穴の位置と東側一部に残されていた壁とからほぼ楕円形を呈するプランであると推定される。床はロームを踏みかためて作られていたが凸凹がはげしく、西側においては床面は確認されず張り床も認められなかった。おそらく宅地造成の際に破壊されたものとおもわれる。又周溝はまわっていなかった。柱穴は計10個発見された。

その内、No.1, No.4, No.5, No.6, No.7, No.8, No.9のピットは共に類似した掘削状態を示し、炉あるいは直立すると思われるNo.3, No.10の柱の方向に傾斜していた。壁は一部で確認されたほか全く不明である。炉は住居址のほぼ中央に位置し床面を掘りくぼめたもので、炉の南側に半欠の勝坂式土器(浅鉢)が埋設されていた。さらに炉の中央に径20cm、深さ20cmのピットが認められたが、性格その他は不明である。炉に使用されていた土器は火力をあまり受けていなかった。

本住居址は、炉に埋設されていた土器及び床面 覆土中より出土した多数の土器片が勝坂式期のものであることから、勝坂式期に属するものと思われる。本住居址に関しては、柱穴の状態から推定される上屋の備蓄方法どのようなものであるか、又、炉中央のピットはどのような性格のものであるか、疑問が残るところである。

801号住居址の炉の南側を、住居址を切って東側に走るU字溝が発見された。ブルドーザーによってローム層の土が取り去られているため深さその他は不明であるが、住居址西側ではローム層を掘りくぼめ、東側にあいては溝底に黒色土をはってかためてあった。溝底には小石、砂の堆積が認められたことから排水溝と推定される。U字溝覆土中より勝坂式土器片数十片が出土したが、これは、801号住居址を切って作られているという理由によるものであろう。

なお、このU字溝と集落をめぐるV字溝とかどのような関係をもつのかは発掘不可能のため不明である。



朝光寺村だより 9

1968.8.25

朝光寺原遺跡調査本部

荏原高校班調査地区中間報告

佐藤安平

荏原高校班の調査方法は基本的には昨年と同様に10m×10mを1区とし、今年度の調査目的である住居址の平面プランと、その住居址の時期を確認し、昨年度の1次調査での未調査地区を調査し集落の範囲を把握せんと全力をあげている。

8月25日現在図示せる如く、9基を確認した。その結果をまとめてみると下表のとおりである。

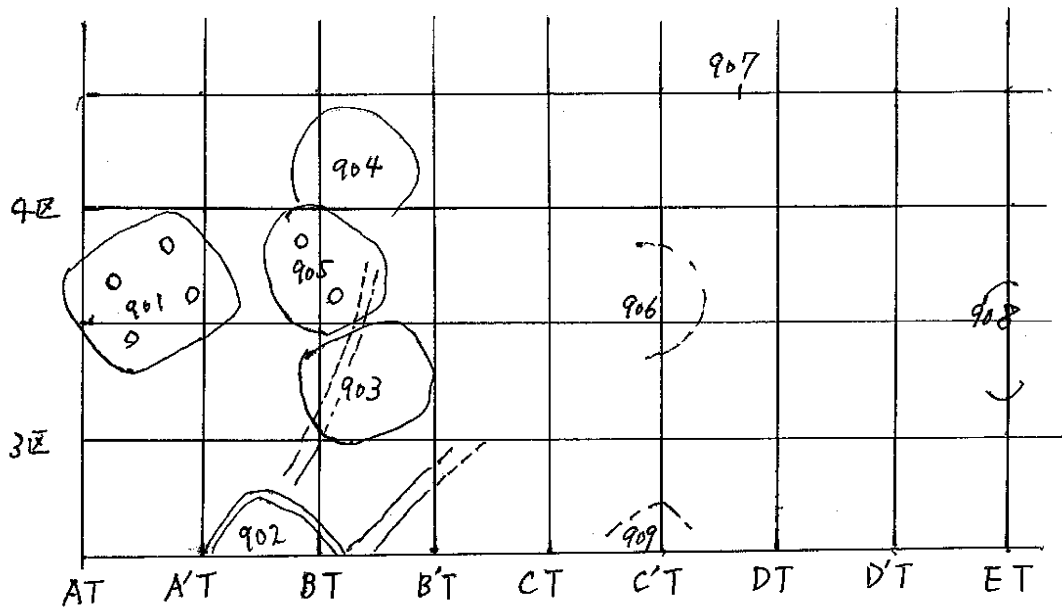
住居址	時期	残存状態	平面図	大きさ・主軸	備考(遺物・他)
901	宮の台	ほぼ完全	胴張隅円方形	710cm×580cm	甕3 壺2 土錘1 完堀
902	朝光寺原	1/3を欠く	胴張隅円方形	不明	朝光寺原式甕形工器完形1 壺底部1 焼失(完堀できず)
903	宮の台	ほぼ完全	胴張隅円方形	不明	土器片ブロック 小形壺形完形1 甕1
904	五領	ほぼ完全	方形	不明	調査進行中 壺甕石斧
905	久ヶ原	ほぼ完全	不整円形	不明	石斧2 壺甕破片多数 調査進行中
906	不明	ほぼ完全	不整円形	不明	壺甕石斧浅鉢器台
907	宮の台	不明	不明	不明	壺甕土錘1 石斧3 調査進行中
908	宮の台	不明	不明	不明	現地表下1.9mのため 完堀不可能
909	不明	不明	不明	不明	壺甕石斧

以上の通りであるが、901号902号住居址を除きすべて調査中であるため詳細については不明な点が多いことを明記しておく。

いずれにしても平均土下80cm、特に908号住居址は1.9mを計り、調査期間中の完堀はというてい不可能である。

その他特記すべき出土遺物は、3-B トレンチU字溝上より出土した小形壺形土器内に炭化物(菜種?)が検出されている。又、906号住居址に隣接して縁泥変岩凹石と埋没の縁泥変岩Eに比定できる甕形土器2が、検出されているのは、縄遺跡期、縄文中期の集落の性格を認識するうえに極めて注目すべきともいえよう。

その出土遺物は極めて多量で、すでに段ボール15箱を数えている。いずれにしても、調査区域1,800㎡のうち6割の調査ができ、残された区域をさらに全力をあげ朝光寺原遺跡第2次調査の目的に叶うように努力している。



朝光寺村だより 11

1968.8.29

朝光寺原遺跡調査本部

903号住居址概要

立正大学2年 小山道夫

903号住居地はAトレンチを拡張して床面及び土器片ブロックを確認したが、壁面を確認することはできなかった。しかし、東側・南側を拡張した結果、明確なる壁を検出し、隅丸方形を呈するプランを確認できた。この住居址は6.50×6.00cmを計ることができ、4隅にPit1(約-90cm)Pit2(約-85cm)Pit3(約-65cm)Pit4(約-55cm)の4つのピットを確認。中央に90cm×100cmの良好な炉址が確認された。

さらに遺物は西壁付近に小形長頸壺、ほぼ中央に長頸壺、北東壁付近に甕、北壁に分銅型打製石斧や前記の土器片ブロックが北西壁付近に密集していた。その他、土器の底部が点々と散在して確認された。これらの多量の出土遺物などから見て、この住居址は宮ノ台期と推定できる。

905号住居址

立正大学1年 横溝孝雄

905号住居址は904号住居址を確認するために拡張した際発見されたもので、住居址の規模は長径6.6m短径5.6mで、壁は北側が良好に出たが、南側、東側、西側とも攪乱のため明確に確認できなかった。

住居址の形は不整楕円形を呈するものである。床面は北側が良好であるが南側になると床面であると判断するには不明瞭であり、また住居址内に性格の不明な約40～50cmの溝が入っている。このため炉は一部切られてしまっており破壊されていた。また、住居址内には、焼土が北側に偏して約70×90cmの範囲に広がっている。中央が最も厚く約14cmの数値を計ることができた。柱穴は4ヶ所に認められた。すなわち北側よりPitA(床面より-85cm)PitB(同じく-60cm)PitC(同-61cm)PitD(同50cm)である。周溝は北側に部分的に見られる。前述の如く南側においては錯乱のため確認することができなかった。本住居址の時期は久ヶ原期に推定できる。

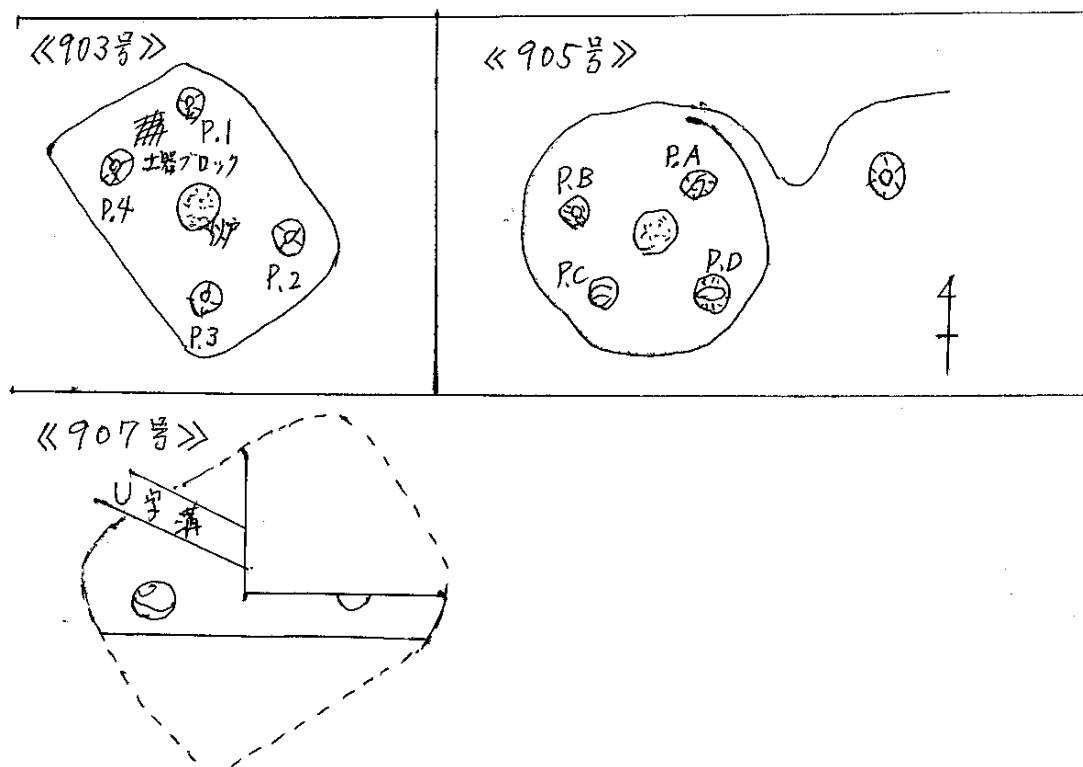
907号住居址

立正大学1年 須山幸雄

907号住居址はCトレンチ---4区に確認された住居址である。この住居址は現在荏原高校によって発掘されている台地のほぼ西側に当り、昨年(1967)の第1次調査終了後のブルドーザーによる宅地化で、黒色土の上にローム層が20cm～30cmにわたって堆積している状態である。

この住居址の床面までの深さは現地表面より75cmあり、床面の状態は、中央に寄るほど非常に良く踏み固めてあり、極めて良好である。しかしながら確認できた良好な東壁面より30cm以内はあまり良い状態とは言えない。この住居址の北側には幅80cm、深さ40cmのU字溝が東西に走っている。なお、この溝が本住居址を横切っているかは、まだ不明である。

周溝は囲った住居址のプランは隅丸方形にて長軸は約 6 m と考えられる。時期は床面直上より久ヶ原式土器片が多数出土したことから、久ヶ原期に属するものと推定される。なお、現在本住居址は約 1/2 ほど掘り上げられているが、日数の関係から完掘することは不可能と思われるため、現在の状態で本住居址の調査を終わらせたいと思う。



雑感

- ・炎天下 20 日間にわたるこの発掘もあとわずか。皆さんおつかれのことと思いますが、あと数日の有終の美となるべく一層の御精励を。
- ・ついに出た！寝言で恋人(?)の名を呼ぶ T 君。みんないっせいにガバと起きて聞き耳をたてる。
- ・台風 10 号のため、この数日雨に降られっぱなし。ために、日大班は調査の 9 月持ち込みを余儀なくされる。

